



一人ではどうにもできない貧困、
だから一緒にかえていく。

We walk together toward the world without poverty.

アクセス

活動報告書 2019-2020

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



私たちは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています

Message

フィリピンを初めて訪れてから、18年。
これまで、100人以上のお母さんたちにお話を伺ってきましたが、
ほとんどのお母さんたちの夢は「子どもに十分な教育を受けさせること」で
した。「できることなら、自分で働いて子どもたちを養いたい」とも。

そうした声に応え、私たちは「子どもに教育、女性に仕事」を活動の
柱として、活動を続けています。

31年間の活動の中で、私たちは「エンパワメント（力をつける）」と
いうキーワードを大切にしてきました。フィリピンの貧困地区の子どもたち
や女性も、日本で暮らす私たち一人ひとりも、「社会を変える力」を微力
であっても持っている。

だからこそ、私たちは「貧困や人権侵害のない、平和な世界を創りたいと願
う人々が出会える場」、「社会を変える力を伸ばしあう場」であり続けたい
と思っています。



認定NPO法人アクセス
事務局長 野田 沙良

学生時代にアクセスのスタディツ
アーに参加して以来、フィリピン
が大好きに。日本での企業勤務、
フィリピン現地インターンを経て、
2007年アクセス入職。三重県出身。

アクセスとは

「6人に1人が、小学校を卒業できない」

そんなフィリピンで、「子どもに教育、女性に仕事」を提供する国際協力NGOです。

1988年に京都で設立されて以来、フィリピンの人々とともに活動を続けてきました。

フィリピンの貧しい人々も、日本で暮らす人々も、ともに地球市民として

「貧困をはじめとする社会的な課題を、一人ひとりが主体となって解決し、
より良い社会を創っていく」ことをめざしています。

Aspiring Citizens for Community Empowerment with Sunny Smile

Contents

目次

フィリピンの現状とアクセスの事業地	3
アクセスのミッション	3
アクセスの活動概要	3
2019年度 活動ハイライト	4
子どもたち、スタッフ、サポーターの声	7
アクセスのあゆみ 1988-2020	8
アクセスの組織図	8
メディア掲載	9
2019年度事業報告 活動全体をふりかえって	10
組織診断から見えてきたもの	12

2020年度 活動計画ハイライト	13
2019年度 決算報告	14

私たちのめざすもの

誰も犠牲にしない豊かな社会	16
私たちの活動の柱	17
エンパワメントと組織化	18

役員・スタッフ	20
活動を支えてくれている皆様	22

フィリピンの現状とアクセスの事業地

フィリピンの現状

- ✓ 5人に1人が貧困層 *1
- ✓ 6人に1人の子どもが小学校を卒業できない *2
- ✓ 女性の雇用率は、男性よりも30ポイント低い *3

都市スラム マニラ市トンド地区

アジアでも名の知れた貧困地区トンド。首都圏から出るゴミの集積場であるスモーキーマウンテンは、このトンド地区内にあります。ここでの活動は2005年から始まり、現在は地区内の若者や子どもたちを対象とした教育支援事業を行っています。



農漁村 ケソン州ペレーズ地区

小さな島の一画にある、人口12000人ほどの貧しい農漁村地区。ココナツ農業や漁業で生計を立てる人々が大半を占めています。ここでは1999年より、教育支援、フェアトレードなどの活動を行っています。



[データ出典]

*1 : Philippines Statistics Authority Open STAT <http://openstat.psa.gov.ph/>

*2 : Philippines Statistics Authority Open STAT <http://openstat.psa.gov.ph/>

*3 : "Key Indicators for Asia and the Pacific 2018" Asian Development Bank

アクセスのミッション

アクセスの
3つのミッション（使命）

どれか1つ欠けても
貧困をなくすことはできない、
と考えています

*アクセスのミッションの詳細は、P16
～19をご覧ください。

貧困の痛みを
和らげる

教育・生計支援
人権擁護

貧困の原因を
明らかにしながら
貧困をなくそうとする人を
増やす

協力できる
場を提供する

アクセスの活動概要



子どもに教育を
子ども教育プログラム



女性に仕事を
フェアトレード



日本の若者に成長の場を
スタディツアー／ボランティア／
インターンシップ

2019年度活動ハイライト



写真：新品の文房具セットを受け取って大喜びの子どもたち

子どもの教育

6人中1人が小学校を卒業できないフィリピンで、



286人

の子どもたちを支援しました

子どもの教育支援 2019年度の3大ニュース

- 1 42人が小学校を**卒業**
- 2 夏休みに**週3回**、新学期が始まってからは**月2回**の**補習授業**を実施
- 3 困難に直面した子どもをサポートする集落ごとの**保護者会活動**が充実

[教育支援プログラム 参加者数]

子ども教育プログラム	244人
幼稚園運営	42人
保護者会活動	286人



子ども教育プログラムの仕組み

2019年度活動ハイライト



女性・若者の仕事

子どもの幸せを願う母親や、働きたい若者たちへの仕事の提供

11

人に

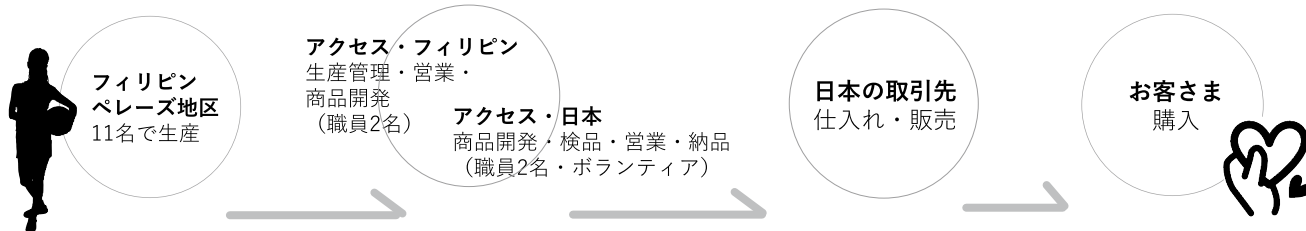
仕事の機会を提供

写真：
真剣なまなざしでココナッツ殻を丁寧に磨く、
ペレーズのフェアトレード生産者。



フェアトレード事業 2019年度の4大ニュース

- 1 フィリピンでの売上が前年度比**1.4倍**に／日本での売上が過去最高の**186万円**に
- 2 生産者には、平均月**3,900ペソ**の収入を提供（米97キロが買える金額）
- 3 生産者を対象にした商品開発セミナー、協同組合化に向けた訪問研修で能力強化



若者の居場所づくりと育成

文化活動や、清掃・植林ボランティア、学習会などを通じ、抱える問題を共有することのできる居場所をつくり、地域のために活動する人材を育てる青年会を組織

（2019年度は予算をつけず、自主的な活動の相談に乗る形で支援）

39

人が活動に参加

写真：奨学生のための補習授業で読み聞かせをしている青年会メンバー



2019年度活動ハイライト

出
会
い

スタディツアー参加 47人

*新型コロナウイルスの影響を受けて、2020年2～3月に予定していたツアーについては、開催を断念しました。

写真：フィリピンの子どもたちと交流する日本の大学生



講師派遣 20件

写真：連携企業の本社にて、子どもの貧困と教育支援について講演

参
加

900人以上が活動に参加

中古の本・CD・DVD・ゲームの寄付	67件
書き損じハガキ	45件
会員・サポーター	753口
継続的に活動したボランティアスタッフ	34人

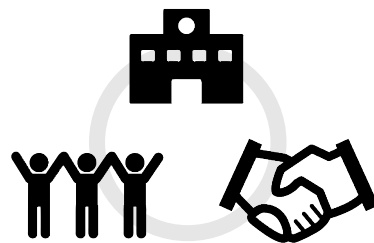
(P21のスタッフ一覧、P23の協力団体リストもご参照ください。)



協
力
・
連
携

30の企業・学校・非営利団体などとの連携

学校	4校
企業	13社
非営利団体・グループ	13団体・グループ



海外プロジェクトへの寄付、資金・物品の寄付、募金箱の設置、フェアトレード商品の販売
物品の収集、海外研修の受け入れ などの形でご協力いただきました。

子どもたち、スタッフ、サポーターの声



ジャニスちゃん
4年生／9才
ペレーズ地区 奨学生

日本のおばあちゃんが長生きできますように

日本のおばあちゃん（子ども教育サポーターの方）からお誕生日プレゼントが届いて、とても嬉しかったです。お母さんは私のお誕生日に、パンシット（焼きビーフン）を作ってくれました。フィリピンでは、長寿を願って、お誕生日にパンシットを食べる習慣があるのです。日本のおばあちゃんがずっと健康で長生きできるように、いつもお祈りしています。学校では、しっかり理解できるよう、先生の話しをきちんと聞くようにしています。お母さんときょうだいを助けるためにも、頑張って勉強します。



ジェイミー・アマンテ
都市貧困地区
子ども教育プログラム担当
スタッフ
(旧：奨学金プログラム)

子どもたちに同じ辛さを経験させたくないから

私は貧困の中で生きる子どもたちが学校に通い続けられるよう、自分にできることは何でもしたいと思っています。都市スラムで暮らすことがどれだけ大変か、身をもってよく知っているからです。ゴミ収集で生計を立てる家庭に育った私は、学用品を買えない辛さを何度も経験してきました。「粗末な服装をしているから」と見下されたり、十分な教育を受けられなかったことによる差別を経験したりしてきました。子どもたちには、同じ思いをさせたくないという想いで、この仕事に取り組んでいます。



廉屋達大さん
リードサイクル株式会社
法人サポーター

スタディツアーでの経験から起業へ

「自分を変えたい!」という思いで、学生時代に参加したアクセスのスタディーツアー。ボランティアとしても活動していくうちに、「雇用を生み出さないと!」という想いが高まり、会社員生活を経て起業しました。以来、自分を変えてくれたアクセスへの恩返しとして、会社として毎月5,000円をアクセスへ寄付しています。将来的には、フィリピンでも雇用を生み出す事業を立ち上げたいと考えています。アクセスでの経験がなかったら、このようなキャリアを歩むことはなかったと思います。会社経営をしていく中で得たスキルやマインドで、アクセスに恩返ししていきたいです。



榎本 桂子 さん
翻訳ボランティア

翻訳していると、子どもたちの姿が目には浮かぶ

アクセスの奨学生たちのことを、普段はなかなか身近に感じることはできませんが、報告書や手紙を翻訳していると、彼らの姿が浮かんで来て、思わず笑みがこぼれたり、頑張る子どもたちに心の中でエールを送ったりしています。アクセスは私にとっても、遠くフィリピンで生活する子どもたちのことを思い出させてくれる大切な存在です。

アクセスのあゆみ 1988-2020

1988年	「京都アジア文化交流センター」として創設 留学生寮・シェルターの運営 滞日外国人の支援活動（1994年まで）
1990年	フィリピン・マニラに現地事務所を開設
1991年	ピナツボ火山噴火
1993年	ピナツボ火山被災地にて事業開始
1994年	ケソン市パヤタス地区にて事業開始
1997年	パサイ市アペロクルス地区でプロジェクト開始 フィリピン現地事務所を現地法人に改組
1998年	「アジア文化交流センター」と改称
1999年	ケソン州アラバット島ペレーズ地区でプロジェクト開始
2000年	特定非営利活動法人に改組
2005年	「アクセス - 共生社会をめざす地球市民の会」と改称 マニラ市トンド地区スモーキーマウンテンで事業開始
2011年	パートナーシップ大賞グランプリ／第五回かめのり賞 受賞
2016年	認定NPO法人に認定 アペロクルス地区事業終了
2017年	社会貢献者賞／ヒューマンかざぐるま賞 受賞
2018年	創立30周年 ピナツボ火山被災地事業終了
2019年	パヤタス地区事業終了

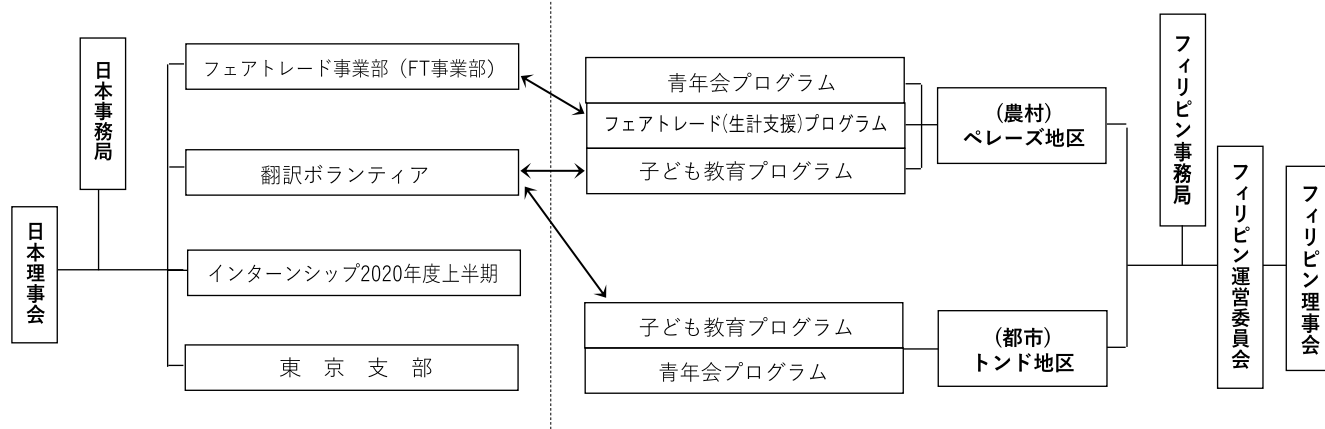


アクセスの組織図

2020年8月時点

アクセス・日本

アクセス・フィリピン



ボランティアやインターンが活躍

アクセスで定期的に活動するボランティアやインターンは、年間30～40人！

「貧困をなくしたい」と願う人々が出会い、話し合いを重ねて、課題の解決に取り組んでいます。「楽しい」「誰かの役に立つ」そして

「自分の成長にもつながる」ことを大切にした活動作りを心掛けています。



メディア掲載

2019年度は、新聞に11回、取り上げていただきました。

京都新聞 2019年7月12日



京都新聞 2019年12月12日



フィリピンの子もたちや女性に、日本の若者に、生きる力を伸ばす場を。

あなたのご寄付で、私たちのチャレンジを応援してください！

月1,000円からの
マンスリーサポーターとして



アクセスの活動に参加してください。

アクセスへのご寄付は、
税控除の対象です。

確定申告により最大**40%**が戻ってくる！
* 月1,000円のご寄付で年間約5,000円が戻ってきます。

アクセスは、京都市から認定を受けた認定NPO法人です。個人の場合、所得税および地方税（京都市府在在の方）が受けられます。法人の場合、損金算入ができます。

アクセスの活動をもっと知りたい方は、メールニュース（無料）にご登録ください！



2019年度事業報告

活動全体をふりかえって

・・・・・・ 2019年度 アクセス7つの成果と課題 ・・・・・・・

- | | | |
|---|------------|------------------------------------|
| 1 | フィリピン事業再編 | 事業地数・プログラム数を削減したことで、活動の質が向上 |
| 2 | 子ども教育プログラム | 42人が小学校を卒業／集落ごとでの保護者の支えあい活動が活発に |
| 3 | 生計支援プログラム | フェアトレード商品の売り上げが過去最高額に |
| 4 | 30周年記念事業 | フィリピン人スタッフのための日本スタディツアーが成功 |
| 5 | 30周年記念事業 | 10年後のゴール議論が進展、日比共通の具体的なゴールを持てるように |
| 6 | 日本事業再編 | 既存のボランティア支援チーム体制が機能しなくなり、新体制にチャレンジ |
| 7 | 組織診断事業 | 財務状態を抜本的に改善することを目的に、専門家とともに組織診断を開始 |

フィリピン事業の再編、納得感をもって始動

2019年度はアクセスにとって、活動する事業地および事業数を大きく絞るという、重要な決断を行った年でした。2018年度まで4か所あった事業地を2019年度より3か所に減らし、2020年度からは2か所にするという決定を行いました。また、2018年度までは多くの異なる事業を行ってきましたが、今後は以下の2つに絞るということも決定しました。

- ① 子ども教育プログラム
- ② フェアトレードプログラム

私たちのような小さな団体が多くの地域で異なる事業を同時に行うと、力が分散して良い成果を出すことが難しくなると考えたためです。また、幼稚園運営を行ってきたピナツポ火山被災地やパヤタス地区では、フィリピン社会福祉開発省と自治体が幼稚園運営に力を入れるようになったこともあり、事業を終了する節目として適切だと判断しました。

こうしたフィリピン事業の再編を行ったことで、日本・フィリピン（以下、「日比」）スタッフの業務的な負担が軽減。その結果、中長期的な活動の方針を議論する時間が確保しやすくなるとともに、活動の質も向上しました。

30周年記念プロジェクト「日本スタディツアーと、10年後のゴール議論」の成功

2019年度に最も力を入れた取り組みは、30周年記念プロジェクトです。10年後のゴール議論とは、農漁村ベレーズ町と、都市スラム・トンド地区の2か所で、2029年までに達成したい事業ごとのゴール（どんな活動を、誰と一緒に、どんなふうに取り組むのか、規模、達成したいことの数値目標・質的目標）を設定しようというものです。フィリピンと日本で数回の議論を重ねたのち、11月にはフィリピン人若手ス

タッフ2名を日本に招いて、日比合同のワークショップも開催しました。理事・職員・ボランティア・インターンといったさまざまな関係者とともに、「私たちが目指す未来のイメージ」を共有できたことは、非常に大きな成果でした。

また、フィリピン人スタッフのための日本スタディツアーの実現にあたっては、150人以上の方々からご寄付をいただき、約50人のボランティア・インターンが運営に携わってくれました。これだけ多くの人々と一緒に1つのプロジェクトを成功させるという経験は過去になく、アクセスにとっての1つのターニングポイントになったように思います。

フィリピンでの職場環境の整備と、若手の育成という課題

フィリピンでは労働環境の整備や、若手指導者育成のための施策に少しずつ取り組んできましたが、2019年度も2名の職員が退職しました。指導者となれる若手職員の定着と育成が、依然大きな課題となっています。

そんな中、11月にフィリピン人スタッフを招いて実施した日本スタディツアーは、未来の指導者を育成する場として、重要な役割を果たしたと言えます。また、二人の来日を通して育まれた日比の若手職員・理事たちの関係は、今後のアクセスの活動にプラスに働いていくはずです。

底力を発揮し始めた日本事務局

2019年度は、フェアトレード商品の売上額が過去最高を記録しました。また、支援者を増やす取り組みにおいても、頭打ちになっていたサポーターの数が再び増え始めました。2018年度から取り組んできた、インターネットを活用した広報施策の成果が出始めたのです。ウェブサイトの刷新に続い

て、メールニュースの配信を開始し、SNSでの情報発信も強化したことで、アクセスに関心を持ってくれる人が増えるとともに、取引先や支援者の方々とのコミュニケーションも活発になり、さまざまなプラスの変化に繋がりました。

その背景には、事務局内での縦割り分業を減らし、1つの業務を複数スタッフで担当する体制に移行してきたことがあります。得意分野の異なる4人の職員が、苦手分野を補いながら個性と能力を発揮できる環境が定着してきたことが、組織としての成果につながっている実感があります。

ボランティア支援チーム活動の終了

他方、長年アクセスの特徴であった大学生によるボランティア支援チームはメンバー減少が続き、2019年度で活動を終了しました。年度後半からは、事務局スタッフが旗振り役をしながら、ボランティアやインターンが期間限定のプロジェクトチームに所属するというスタイルでの活動に挑戦し、一定の成果を出すことができました。

新しい一歩に向けた組織診断事業

いよいよ深刻化してきた財務状況の悪化を食い止めるべく、2020年1月からは、Panasonicからの助成を受け、NPOコンサルタントの方の協力を得ながら、組織診断にも取り組み始めました。さまざまな立場のアクセス関係者と話し合い、アクセスの強みや課題を洗い出したこの診断を経て、財務状態のみならず活動や組織のありようを改善するヒントをも見つけることができました。2020年度後半より、そのヒントに基づいた新事業計画に取り組んでいきます。

新型コロナウイルスが与えた活動への打撃

フィリピンでは新型コロナウイルスの感染拡大防止を目的に、外出禁止令などの厳しい措置がとられており、アクセスのフィリピン事業にも大きく影響が出ています。2020年2～3月に予定していたスタディツアーは中止。また、3～6月は外出禁止令が出されていたため、子ども教育プログラムやフェアトレード事業の活動も、すべて停止となりました。

その間、外出禁止令により収入が途絶えた奨学生の家族やフェアトレード生産者を支えるため、フェアトレード生産者に対しては労賃前払いを、奨学生236世帯に対しては、皆さまから寄せられた寄付金をもとに、食費の支給を複数回行いました。

2020年度の事業計画の一部断念と、「#アクセス存続募金」の実施

新型コロナウイルス対策がいつまで、どの程度続くのか、先の見通しがつきません。そのため、2020年度に予定していた以下の2つの事業を断念することとなりました。

- ① フィリピン・スタディツアー
- ② トンド地区（都市スラム）での子ども教育プログラムの実施エリア拡大

スタディツアーの中止による減収（約600万円）を補うために実施した「#アクセス存続募金」では、335名の方々からのご協力により711万円ものご寄付をいただき、当面の資金難を乗り越えるめどがつけました。今後は、組織診断に基づく新事業計画に取り組み、抜本的な財務構造の改善をめざします。皆さんから託していただいた想いを原動力に、自慢に思ってもらえる団体へと成長していきたいと思っています。

30周年記念事業 日本スタディツアーで来日したランスの感想

日本スタディツアーでの経験を通して、たくさんのことを学ぶことができ、とてもうれしく思っています。

10年後のゴールを話し合うワークショップでは、今まで具体的にイメージできずにいた、アクセス日本の役割を知ることができました。

それに、未来のことを話し合う中で、ワクワクを感じられました。日本とフィリピンでは物の見方も違うので、共通のゴールを持つのは難しいんじゃないかと思っていましたが、話し合うことで、同じ方向をめざしていこうと思えました。こういう経験をさせてもらったことに感謝しています。

アクセス・フィリピン 農漁村ペレーズ地区担当 ランス



組織診断から見えてきた「アクセスらしさ」を羅針盤にして。

認定 NPO 法人アクセス
事務局長 野田沙良



数年来の財務危機。そこに降りかかってきた、新型コロナウイルスの感染拡大防止のための活動制限。この大きな困難を乗り越えるために、私たちが羅針盤として頼るべきものは「アクセスらしさ」である。2020年1月より、パナソニックの助成金を受けて実施した組織診断事業を通し、私たちは今そんな風に考えています。

アクセスらしさって？

「財務危機を乗り越えるために、今私たちは何に取り組むべきか」そんな問いの答えを見つけようと、私たちは2020年1月から、NPO コンサルタントの方の力をお借り

しながら、8か月間の組織診断事業に取り組んできました。その間、私たちはたくさんの方々の支援者・協力者の方々の声を聴き、その声を通して「アクセスらしさ」「私たちの強み」を確認することができました。左の囲みの中の「アクセスらしさ・強み」をご覧ください。

それは、これまで「エンパワメント^{*1}」や「地球市民を増やす^{*2}」といった、抽象的なミッションの下で行ってきたアクセスの活動が、一人ひとりの支援者・協力者にとってどういう価値を持つものなのかに耳を傾ける作業であり、またアクセスに固有の「守りたい風土」を確認する作業でもありました。

これまで私たちは、そうした自分たちならではの魅力に気づいてい

ませんでした。私たちの良さを肌で感じてくれる人たちによって活動は支えられてきましたが、その良さを私たち自身が自覚しておらず、わかりやすく発信してこれなかったのです。今私たちが取り組むべき最大の課題は、「自分たちらしい魅力を、参加してくれる人にしっかりと体感してもらえようように事業を組み立てること、アクセスに関心を持ってくれる人にきちんと伝わるように発信すること」である。そう、確信が持てました。

もっとワクワクしてもらえるアクセスになるために

アクセスらしさを磨き、私たちらしさがもっとダイレクトに伝わる

アクセスらしさ・強み

- ✓ アクセスにおける支援（エンパワメント）とは、する側される側を固定しないものである
- ✓ 「違いを超えてつながり、支え合い、学び合える関係性を築ける場」を提供している
- ✓ 話し合いを重んじる（考える力、言葉で伝える力、議論する力を相互に伸ばしながら）
- ✓ 素の自分でいられる場所を提供している

カタチを追求していけば、それに共感する人たちと出会う機会が増え、ボランティアやインターンとして活動に参加してくれる人たちが増えるでしょう。フェアトレード商品を買ってくださったり、商品を応援してくれる人も増えるはずで、アクセスのサポーターになるなどして、アクセスを応援してくれる人もきっと増えていくでしょう。

そして、アクセスに協力して下さってきた皆さんにはきっと、これまでにアクセスの活動にワクワクしてもらえようになるはず……。そうなるよう、一生懸命がんばってみようと思っています。そのプロセスの中で、皆さんの「声」をこれまで以上に参考にさせていただけたらと願っています。

「新しい一歩」を踏み出すのは、正直ほんの少し不安で、緊張しますが……皆さんにも一緒に、この一歩を歩んでいただけたら、こんなに勇気づけられることはありません。

^{*1} 生きる力・社会を変える力をつけること
^{*2} 社会や世界の問題を自分事ととらえ、構造的な原因を理解する人を増やすこと

2020年度 活動計画 ハイライト



子どもに教育を
子ども教育プログラム

2 地区 / 233人



女性に仕事を
フェアトレード

6人



日本の若者に成長の場を
スタディツアー／ボランティア／
インターンシップ

47人

- ✓ 都市スラム・トンド地区内での新事業地で、2021年度より子ども教育プログラムを開始できるよう、事業計画の見直しと準備を進めます。
- ✓ 2021年度より子ども教育プログラムを中高生に拡大できるよう事業枠組み作りに取り組みます。
- ✓ フェアトレード生産者団体が協同組合原則にのっとった組織として自立していくことをめざし、生産者とともに運営規約の策定に取り組みます。また、カード生産に必要な手すき紙の自主生産計画について再検討します。

コロナ禍における活動の中止・延期・特別対応

- ✓ 子どもたちの生きる力を伸ばす補習授業は、プリントを使用した在宅学習として実施
- ✓ 子どもの権利保護のための保護者セミナーを、プリントを使用した在宅セミナーとして実施。月1回の保護者会活動は、外出規制が緩和されるまで延期。
- ✓ フィリピンのスタッフおよび事業地の子どもたちや保護者を対象に、新型コロナウイルスによるストレス対策のためのセミナーを、オンラインやプリント配布等の形で実施。
- ✓ 年5回予定していたスタディツアーをすべて中止。スタディツアー収入の減少による経営危機を乗り越えるため、「#アクセス存続募金」キャンペーンを実施。（8月15日に終了し、711万円のご寄付をいただくことができました！）
- ✓ 日本でのボランティア活動、インターンシップ、イベント等も可能な限りオンラインで開催。検品など、事務所でないと実施できない活動については、感染予防対策をとりながら少人数で実施。

組織診断に基づく「アクセスらしさ」を最大化する 3つの取り組み

1

もっと伝わる 言葉で伝える

組織診断を通じて見えてきた私たちの強み（P12掲載）をしっかりと伝える言葉で外に向けて発信します。

2

スタディツアー に代わる 若者育成事業を

スタディツアーで培ったノウハウを最大限活用し、日本の若者の「変える力」を引き出す国内新規事業を開発します。

3

声から学ぶ フェアトレード 事業に

購入者の方々の声から商品の魅力を明らかにし、その魅力を伝えることでファンを増やします。

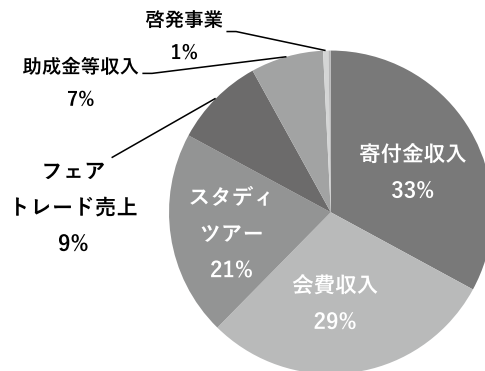
2019年度決算報告

活動計算書

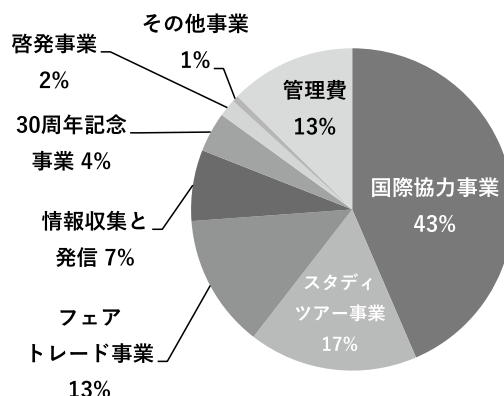
2019年 4月 1日から2020年 3月31日まで [税込] (単位: 円)

科目	金額	
Ⅰ 経常収益		
1. 会費収入		
正会員費	570,000	
事業別サポーター会費	1,916,000	
子ども教育サポーター会費	3,573,000	6,059,000
2. 寄付金収入		
事業指定寄付金	3,154,325	
一般寄付金(事業指定外)	3,615,605	6,769,930
3. 受取助成金等		
受取助成金		1,495,000
4. 事業収益		
フェアトレード事業	1,867,745	
スタディツアー事業	4,220,591	
国際協力普及啓発事業	110,660	
その他事業収益	46,594	6,245,590
5. その他収益		
受取 利息		26
経常収益 計		20,569,546
Ⅱ 経常費用		
1. 事業費		
国際協力事業	9,180,689	
フェアトレード事業	2,815,307	
スタディツアー事業	3,579,274	
情報収集と発信事業	1,503,018	
啓発事業	373,522	
30周年記念事業	844,155	
その他の国内事業	135,332	18,431,297
2. 管理費		2,659,876
経常費用 計		21,091,173
Ⅲ 当期経常増減額		△ 521,627
Ⅳ 経常外収益		0
Ⅴ 経常外費用		0
Ⅵ 当期経常外増減額		
税引前当期正味財産増減額		△ 521,627
法人税、住民税及び事業税		70,000
当期正味財産増減額		△ 591,627
前期繰越正味財産額		4,093,229
次期繰越正味財産額		3,501,602

収入内訳



支出内訳



■収入について

1. 会員・サポーター総口数は前年度より32口増え、会費収入は前年度比32.6万円の増加となりました。
2. 30周年記念事業のためのクラウドファンディングに挑戦したことで、寄付者数が前年度より140名増えました。
3. 公益信託アジア・コミュニティ・トラスト、日蓮宗、日本労働組合総連合会（連合）、株式会社パナソニックより助成いただきました。（助成事業名はP22に掲載）
4. フェアトレード事業の売上は過去最高額となりました。新型コロナウイルスの影響で2020年2～3月のスタディツアーを中止したため、スタディツアー収入は前年度より2割ほど減少しました。

■当期経常増減額について

フェアトレード事業の売上額が過去最高を更新、寄付金も予算の125%の額が集まり、2019年度は経常収支が黒字になる見込みでした。しかし、新型コロナウイルスの影響でスタディツアーが実施できなくなったことでツアー収入が予算の7割にとどまった結果、2019年度は52万円の赤字となりました。

貸借対照表

2020年 3月31日 現在

[税込] (単位:円)

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
【流動資産】		【流動負債】	
(現金・預金)		未 払 金	461,924
現 金	44,742	前 受 金	1,606,857
普通 預金	3,811,106	預 り 金	22,204
現金・預金 計	3,855,848	未払法人税等	70,000
(売上債権)		流動負債 計	2,160,985
売 掛 金	4,970	負債の部 合計	2,160,985
未 収 金	203,000	正味財産の部	
売上債権 計	207,970	【正味財産】	
(棚卸資産)		前期繰越正味財産額	4,093,229
棚卸 資産	917,261	当期正味財産増減額	△ 591,627
貯 蔵 品	84,692	正味財産 計	3,501,602
棚卸資産 計	1,001,953	正味財産の部 合計	3,501,602
(その他流動資産)			
前 渡 金	409,835		
前払 費用	86,980		
その他流動資産 計	496,815		
流動資産合計	5,562,586		
【固定資産】			
(有形固定資産)			
什器 備品	1		
有形固定資産 計	1		
(投資その他の資産)			
保 証 金	100,000		
投資その他の資産 計	100,000		
固定資産合計	100,001		
資産の部 合計	5,662,587	負債・正味財産合計	5,662,587

監査報告書

監 査 報 告 書

特定非営利活動法人アクセス
 ー共生社会をめざす地球市民の会
 理事長 新聞 純也 殿

2020年 6 月 2 日
 監事 渡邊 功

私は、2019年度(2019年4月1日から2020年3月31日まで)における
 特定非営利活動法人アクセスー共生社会をめざす地球市民の会の業務及び財産の状況につ
 いて監査を行いました。

その結果、業務については、不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実
 はないことが認められました。また、財産の状況については、NPO 法人会計基準に準拠して、
 財務諸表等が適正に表示されているものと認められました。

以上、報告します。

私たちのめざすもの 「誰も犠牲にしない豊かな社会」



■痛みを和らげながら、原因にも目を向ける

アクセスのミッション（使命）は、3つです。

1つ目は、貧しい人々が今まさに直面している貧困の痛みを和らげようとする活動（教育、生計支援）です。2つ目は、貧困の原因を明らかにしながら、貧困をなくそうとする人々を増やすことです。3つ目は、それら2つを実践し、よりよい社会を創っていく力を、日本人・フィリピン人ともに身につけてもらうために、協力できる場を提供することです。どれか1つ欠けても、貧困をなくすことはできないと考えています。

■国境を越えて思いやりあう関係を築く

アクセスの子ども教育プログラムは、週 300 円（年間 15000 円）で一人の子どもを小学校に通えるようにする、教育里親制度です。本プログラムで支援を受けることになったとしても、その家族がすぐに貧困から抜け出せるわけではありません。しかし、食事さえ満足に準備できないような時であっても、「日本で応援してくれている人がいるんだから、何とか頑張らないか」と感じる人は多く、支援者の存在が心の支えとなっています。もう一方で、日本の子ども教育サポーターの中には、「フィリピンの子どもたちから届く手紙が励みになり、辛い仕事も頑張れます。」とおっしゃる方もいます。単なる経済援助ではなく、「国境を越えて思いやりあう関係を築くこと」ができればと思いながら、プログラムを実施しています。

貧困の中で生きるとは、問題が押し寄せる毎日を生き延びるということです。私たち NGO にそれら全ての問題を解決することはできませんし、問題を解決していくのは問題の中で生きる人々自身です。そんな中、「希望を持ち、前を向いて生きていこう」と思えるよう支援するのが、私たち NGO の役割だと考えます。

■ペレーズの漁獲量減少と日本

アクセスの事業地の1つであるペレーズ地区の漁師は言いま

す。「20 年前は数時間で何キロも魚がとれた。でも今は 8 時間漁を続けてもせいぜい 2~3 キロだ。」ペレーズ近辺の漁獲量減少の最大の原因は、日本、中国、台湾、韓国などから来る大型漁船による乱獲と言われています。実は私たちは、知らず知らずのうちにフィリピン近海でとれた魚を、日本で口にしているのです。

「より便利で、より安く、より質の高い暮らし」を求める日本のライフスタイルは、見えないところで、ほかの国の人々の生活に影響を与えています。こうした日本のライフスタイルを見直し、どうすれば「誰もが人間らしく幸せに暮らせる世界」、「見えないどこかで誰かを犠牲にしない世界」を創れるのか、考えていく必要があるのではないのでしょうか。

■「誰も犠牲にしない豊かな社会」をめざして

日本は中流層の多い経済大国から、格差社会に転落しようとしています。貧困問題は南の国の問題だけではありません、日本でも子どもの貧困・女性の貧困の問題が深刻化しています。そうした中で、世界の見えない誰かを犠牲にすることなく、例えば私たちが直接かかわっているフィリピンの貧しい人々とともに、より多くの人が幸せを感じられるような社会や世界のあり方について議論し、実践していくことがますます必要になっています。

原始時代のような暮らしに戻りするのではなく、しかし便利さや物質的な豊かさばかりを追い求めるのでもない。個人の多様な価値観を尊重しながらも困った時は助け合えるような、新しい形の「豊かな社会」「豊かな世界」が必要になっているのではないのでしょうか。

アクセスは、経済的な貧しさを克服しながら、新しい形の「豊かな社会」を築こうとする人々が出会い、協力できるような場でありたいと考えています。そうした協力が国境を越えて広がり、希望を持って生きられる人が一人でも増えるように、皆さまとともに活動を創っていきたいと思います。

私たちのめざすもの 「私たちの活動の柱」

活動の柱1

エンパワメントという考え方

出会い、協力し、「生きる力」「変える力」をつけ、
ともに課題を解決する

私たちは、貧困問題を解決する主体は、貧困の中で生きる住民自身だと考えています。その上で、住民自身が自らを組織し、協力して自分たちの抱える問題を解決する力を身につけること（エンパワメント）を支援することが、NGOの主要な役割だと考えているのです。

具体的には、教育支援、生計支援、青年育成などのプログラムを通じて生活改善をすすめながら、プログラム参加者の組織づくりを行い、活動の一部または全部を住民自身の手で運営できるようになることをめざしています。また、各地域の貧しい人々が抱える問題（都市貧困コミュニティであれば強制立ち退きの問題、農村であれば大土地所有制の問題など）にも取り組むことのできる、地域全体をカバーする住民自身によって構成された住民協議会の建設もめざしています。

一人ひとりが持つ力は小さくても、得意分野を活かし、支えあい、学びあい、協力する場となる組織があれば、貧困に立ち向かうための大きな力を生みだせる。そう信じて、組織づくりを通じたエンパワメントを大切にしています。

私たちが創ろうとする住民組織とは

私たちが最貧層の人々と共に創り出そうとしている、貧しい人々自身の組織(People's Organization=PO)は、次のような力を持つ組織です。

1. 民主主義を実践する力
2. 事業を運営する力
3. コミュニティ内のより貧しく、より抑圧されている人々を優先することのできる力
4. コミュニティの内外を問わず、人権・戦争(支配者による暴力的支配)という諸問題に取り組むことのできる力
5. 他のコミュニティ・他の地域・他の国の民衆の貧困・人権・戦争(支配者による暴力的支配)への取り組みに開かれ、連帯することのできる力
6. 地方や中央政府と交渉し、場合によっては闘うことのできる力

他方、「北」（先進国）の市民のエンパワメントも、NGOの重要な役割だと考えています。「南」（発展途上国）の貧困問題は、16世紀以降の近代植民地支配に始まる「北」による「南」の支配と搾取の結果です。この地球にある限られた資源や土地を、より多く手に入れることができる、またはより多く利用できる国や人々だけが豊かになり、それらを奪われたり自由に利用できない国や人々は貧しさを強いられます。貧困問題を解決するには、そうしたアンフェアな世界の仕組みを変えていく必要があります。

そして、そうした世界の仕組みを変えていくためには、「南」の貧しい人々の努力だけでなく、「北」の市民の自覚と参加が不可欠です。経済的に豊かでも、社会を変える力をまだ十分に持たない私たち「北」

の市民が協力できるネットワークを創り、議論と実践の場を提供することでエンパワメントする。それもまた、NGOの任務だと考えます。

アクセス日本の、ボランティアやインターンシップの促進に重点を置いた活動は、まさにその実践です。アクセスの目的に沿いつつも、それぞれ異なるテーマや課題を掲げたチームや委員会などが組織され、独自の会議と活動を持って、自分たちで決めたことを自分たちで実行しています。2020年8月現在、事業部・支部・委員会などに所属して活動しているボランティアやインターンの数は34名です。

私たちにとってボランティアやインターンとともに進める活動は、日本の市民のエンパワメントの一つの形であり、それ自身が私たちの会の目的となっています。そして、ボランティアやインターン自身がさらに多くの人々に働きかけ、エンパワメントを進めています。

活動の柱2

地球市民という考え方

「日本人」「フィリピン人」という区別を越えて
「地球市民」として考え、行動する人を増やす

貧困問題に取り組むとき、『南』の問題は『南』の人々が解決するのであり、『北』の人々はそれを外部から支援するだけである」という考え方があります。しかし私たちは、たとえ「南」の地域で発生している問題であっても、「北」の市民も「地球市民」として「南」の市民と同じように問題に主体的に取り組むことができるし、取り組むべきであるという考え方をしています。

1980年代以降、グローバリゼーションが急速に進展・深化し、多国籍企業化による資本の「北」から「南」への移動と、移民・出稼ぎ労働者の「南」から「北」への移動が歴史的規模で進行しています。1990年代以降の日本のNGO活動の発展も、こうした文脈の中にあります。そうした中で、「南」と「北」の市民同士の、政府や企業を媒介としない直接的なつながりが、国境を越えて質・量共に発展しています。日本の社会や政府の問題は日本人の問題、と済ませてしまうことのできない状況が生まれつつあるのです。フィリピンの社会や政府の問題も同様です。

こうした社会背景のもと、アクセスはスタディーツアーをエンパワメントと地球市民形成のための重要な場としてとらえ、力を入れて取り組んできました。アクセスの組織自身も、形式的には日比それぞれの国家の法律に基づきそれぞれの国に法人を組織していますが、実質的には単一の国際NGOとして活動を行っています。

こうして、私たちは「南」と「北」で市民のエンパワメントを進めながら、国境や国籍を超えて同じ目的を共有する「地球市民」という意識でたくさんの人々をつなげ、市民同士の直接の協働関係を築くことを通じて、貧困問題を解決しようとしています。

私たちのめざすもの 「エンパワメントと組織化」

「エンパワメント」とは、アクセスが貧しい人々の支援をする際、もっとも重視している考え方です。

エンパワメントには様々な定義がありますが、簡単に言えば、
「変える力・問題を解決する力をつけること」、と言えます。

自立支援としてのエンパワメント

貧しい人々の生活状態をよくしたいと思ったとき、支援の仕方にはさまざまな方法があります。1つは、食事を提供したり、着るものを提供したり・・・今まさに足りていないものを、現物で提供するという支援です。これは短時間ででき、成果もわかりやすい。けれども、多くの貧しい人々は「援助をもらうより、自ら働いて生活を良くしたい」と願っているのが現実です。

そこで多くのNGOが行っているのが、「問題を解決する手段を教える」という支援です。貧しい農民には、より収穫を得られるような農法を教える。子どもたちには、将来、安定した仕事につきやすくなるために、教育の機会を提供する。働きたくても仕事が見つからない人には、商品として売れる品物を作る技術を身につけてもらえるよう訓練する。こうして、それぞれの人が直面している課題について、その課題を解決するための力を身につけられるような支援（エンパワメント）を行うのです。アクセスのプログラムのほとんどが、これに当てはまります。しかし、アクセスはそれだけで終わりたくないと考えています。

「協力する力をつける」エンパワメント

ある子どもを大学進学まで支援し、卒業後に一流企業に就職できたとしましよう。その子は家族のために立派な家を建て、携帯電話やコンピュータを買って、不自由な生活を実現することができるでしょう。でも、その子が他の貧しい家族については気にかけないとしたら・・・？

フィリピンでは、家族・親戚間での助け合いはとても大切にされていますが、血縁関係にない人々同士が助け合ったり、みんなで協力して問題を解決しようとする姿勢はそれほど強くありません。むしろ、貧しさから抜け出そうと、「家族や親戚のために、他を蹴落としてでも自分はチャンスを掴まなければ」と努力する人が多いといえるかもしれません。

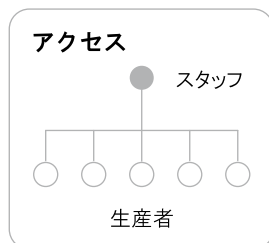
そんな社会の中で、同じ苦勞を抱える人々同士が、力をあわせて共通の課題に立ち向かっていけるようにしていきたい、というのがアクセスの考えです。たとえば子ども教育プログラム（旧：奨学金プログラム）では、子どもたちに教育の機会を提供すると同時に、保護者会を組織しています。保護者会では、子どもたちの多くがお腹をすかせたまま授業を受けているという現状をなんとかしようと、保護者が交代で給食を調理し、届けるという活動を始めました。個人では解決できない問題について、共通の課題を抱えた保護者が自らを組織し、協力して問題解決のための取り組みを実施し、継続できるようにしていく。アクセスは、そうした活動に必要な資金を調達し、その事業や組織の運営にあたって必要なさまざまなスキルを保護者が身につけられるよう、サポートをしています。アクセスでは、こうした集団に対するエンパワメントに力を入れています。

もう1つ、アクセスがめざしているのは、貧しい人々に地域ぐるみで問題を解決しようとする力を身につけてもらおう、ということです。教育や仕事、青少年育成など、特定の分野ごとの事業運営と並行して、地域全体が抱える課題（子どもの権利侵害や、立ち退きの問題など）に取り組める組織をつくることをめざし、活動を行っています。

フェアトレードプログラムの場合

農漁村ベレーズ地区で、地域に豊富にある素材（ココナツ殻など）を活用した商品の生産・販売を行い、そこから得られる収入で生産者の生活を向上させていくという取り組みで

2000年スタート当初



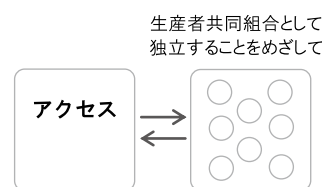
働きたいと願う女性を対象に、技術指導を行い、商品生産を開始。日比共同でデザインを開発し、主に日本で販売。一人ひとりの生産者が、アクセスのスタッフから直接、指導や注文を受けていました。

2012年度



生産者グループを組織。以前はアクセスのスタッフが行っていた発注の配分、品質管理、出荷準備などもメンバーで分担して行うようになっています。アクセス・スタッフは、生産者団体が自立できるよう、スキル研修などのサポートを行っています。

将来的には・・・

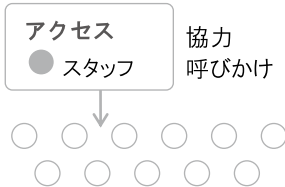


生産者一人ひとりが対等な立場で経営・運営にたずさわり、民主的にものごとを決定する共同組合として、生産者団体が自立することを目指しています。アクセスは、取引先・相談役として関係を継続します。

給食プログラムの場合

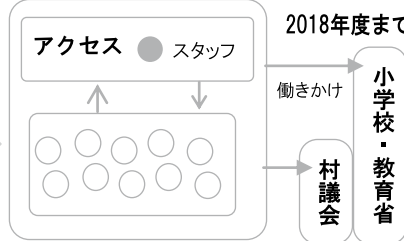
ピナツボ地区の子どもたちのための給食プログラムでは、アクセスが資金を確保し、保護者が買出し、調理、配膳、後片付けを担いました。

2010年スタート



保護者に呼びかけ、「保護者会」を組織

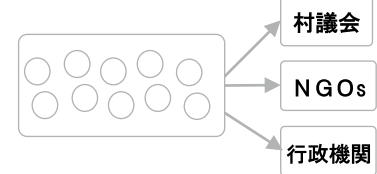
近畿ろうきん（日本の金融機関）からの支援で給食プログラムを実施するにあたり、幼稚園・小学校の保護者を「保護者会」として組織。保護者が協力して、給食を実施する体制を作りました。



保護者会／定期ミーティング

給食準備ミーティングや、調理ボランティアは、保護者間の親睦を深める場に。「小学校卒業まで学べる地域に」という保護者の想いが届き、教育省が2014年に校舎を増設。2014年度は6年生まで開講され、火山被災後、初の卒業生11人が誕生しました！また、2017年度には、村議会が「子どもにやさしいコミュニティ」宣言を行いました。

2019年度からは



人々の力で、未来を創る

校舎増設に続き、2019年度には公立の幼稚園年少組が開校され、教育省による給食も始まりました。保護者会を通じて村人の声を村議会などに届けることで、復興から取り残されてきた地域に、行政の目が向けられるようになったのです。アクセスはこれを機に、ピナツボ地区での活動を2018年度末で終了しました。

貧しい生活の中で、十分な教育を受けることができずにきた人々にとって、事業を運営したり、組織として話し合いでものごとを決めたり問題を解決したりするというのは簡単なことではありません。そんな中、アクセスでは保護者会や生産者団体といった、プログラム参加者によるグループを組織し、日々の活動を通じて、メンバーが事業運営に関するさまざまなスキルを身につけられるようにしています。

アクセス・スタッフの仕事は、そうした事業運営をまずは自らやることで手本を示し、その後、徐々にその仕事を参加者に引き継いでいくこと、そして組織運営に関するアドバイスをしたり、相談にのったりすることです。また、子どもや女性の権利についてのセミナーを行ったり、貧困が生まれる構造についての学習会を行うなどして、住民の意識の向上にも取り組んでいます。

コミュニティ・エンパワメント～地域の問題にとりくむ組織づくり

現在、アクセスが行っているすべてのプログラムのもとで、住民のグループを組織すること、そしてそれぞれのプログラムを組織のメンバー自身が運営できるようになることをめざしています。いずれは、それぞれの組織の代表者によって「住民協議会」がつくられ、地域の多くの人たちが共通して抱えている問題の解決にとりくめるような存在になっていけば、と考えています。

住民協議会の建設と役割

将来的には…

アクセス

アクセスの役割は、住民協議会が取り組む課題について、活動の参考になる情報・人脈などあらゆるリソースを提供したり、活動の相談にのったりすることです。

【ペレーズ地区住民協議会】

生産者共同組合

青年会

保護者会

奨学生会

土地問題

環境問題

女性の権利

子どもの権利

農村地区の貧困の原因の1つは、大土地所有制ですが、一部の農民が不満を口にしたりはできません。でも、土地なし農民が協力し、一斉に声を挙げれば、状況を改善できる可能性はあります。

子どもの権利についても、尊重されるべき権利について知る人を増やし、多くの子どもが団結して権利を主張すれば、権利侵害は減っていきます。

「住民協議会」は、地域が抱える問題について提起し、どうすれば問題が解決できるのかを考え、議論し、行動にうつしていくための場です。

* 2019年度以降、こうしたアクセスの「エンパワメントと組織化」の方向性について見直し議論を行っています。

役員・スタッフ

フィリピン理事会

理事長 カルメンシータ・カラグタグ（メンチ）
理事 リカ・デラ・クルス
理事 石川雅国

副理事長 リコ・ポンス
理事 ロサリナ・クラマー（リサ）

フィリピン事務局



事務局長
ロサリナ・クラマー
（リサ）



総務経理
石川 雅国



フェアトレード
マーケティング担当
ジゼル・フェルナンデス



教育啓発担当
ジェリカ・カイラ・バー
（カイラ）

都市貧困地区



コーディネーター
クリスター・ジョン・ララ
（ジェリック）



子ども教育担当
ジェイミー・アマンテ



農場管理人
ダニーロ・ドティリョス

ピナツボ火山被災地

マニラ首都圏トンド地区

ペレーズ地区

the Philippines

（2020年9月時点）

農漁村ペレーズ地区



アシスタント・コーディネーター
ラニー・トルダ（ランス）



フェアトレード担当
サンドラ・リン・レファゾ



子ども教育担当
リザ・メルカド



子ども教育担当
ジェンナ・リン・オスタガ
（ジェン）



子ども教育担当
ライカ・フェブラー

日本理事会

理事長	新開 純也	元株式会社タカラブネ社長	理事	崎山 政毅	立命館大学教授
常務理事	森脇 祐一	事務局員	理事	白坂 有子	株式会社エコー代表取締役社長
理事	位田 浩	弁護士	理事	杉山 遼	特別支援学校教員
		認定NPO法人大阪精神医療人権センター代表	理事	田中 雅規	株式会社高島屋社員
理事	江口 慶明	関西大学生生活協同組合専務理事	理事	中本 式子	元生活クラブ京都エルコープ理事長
理事	河西 実	NPO法人フェア・プラス事務局長	理事	西村 知晃	NPO法人PALETTE共同代表、会社員
理事	片岡 卓三	医師	理事	野田 沙良	事務局長
理事	菊池 光造	京都大学名誉教授	理事	廣瀬 昌代	キッズファームin大原代表
理事	倉辻 悠平	NPO法人PALETTE共同代表	理事	松本 祐子	中学校教員
		NPO法人ETIC職員	監事	藤野 正弘	認定NPO法人きょうとグリーンファンド理事

日本事務局



事務局長
野田 沙良



常務理事
森脇祐一



事務局スタッフ
竹内彩帆



事務局スタッフ
中村智子



事務局スタッフ
伴野彩

ボランティア・インターン

【フェアトレード事業部】

天野美羽、今町駿介、川村梨果、久保七彩、小林絹江、坂本唯、立石映、津垣真柚子、ドアンティゴックマイ、永谷朱里、山下和穂、渡辺美琴

【東京支部】

藤田直也、白柳飛翔、中村衣里

【インターンシップ2020年度上半期】

村田桃香、陳文俠、藁科拓実、垣内栄、横山英里、川勝来夢、能澤直也、竹内絢子、佐藤夏海

【翻訳ボランティア】

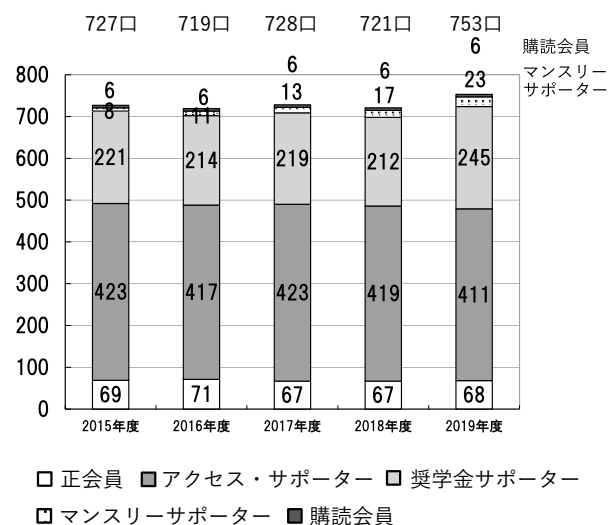
榎本桂子、上條桂、川村梨果、木村龍一、中山実穂、中野英一、西川和予、三浦茜、松本祐子、松岡春香、山田さつき、山本茂、吉井瞳

2020年8月時点

会員・寄付者（2019年度）

会員サポーター数	全 753 口
寄付協力（資金）	個人 207 名、 グループ・学校・法人等 15 件
書き損じはがき	個人・グループ・学校・法人等 45 件／ 2,635 枚
ココロ便	個人・グループ・法人等 67 件／ 169 千円 (本・CD・DVD・ゲームのご寄付)

※各年度末時点の会員サポーター口数



ご支援いただいた助成団体（2019年度）

公益信託アジア・コミュニティ・トラスト「アジア民衆パートナーシップ支援基金」

フィリピン農村部におけるフェアトレードパートナー団体の商品開発力と協同組合化に向けた能力強化事業

パナソニック株式会社

「Panasonic NPO/NGO サポートファンド for SDGs 海外助成プログラム」

フィリピンにおける貧困削減のための財務基盤強化に向けた組織診断事業

日本労働組合総連合会（連合）「愛のカンパ」

フィリピンの貧しい農漁村における、子どもによる、子どものための、子どもの権利意識向上事業

日蓮宗「あんのん基金」

「私の、僕の、ストーリーを絵本に」フィリピンの貧困地区の子どもたちが、自分の痛みや辛さを言葉や絵で表現する力をつけるプロジェクト



アジア・コミュニティ・トラストの助成金で、事業の強化に取り組んでいるフェアトレード事業。グリーティングカードを作る生産者。

ご協力いただいた企業・学校・団体等（2019年度）



株式会社ドロキア・オラシタ	フィリピンの都市スラムの子どもたちへの食と教育の支援（2014年～）
ブックオフコーポレーション株式会社	中古品の寄付によりフィリピンを支援する「ココロ便」プロジェクト（2013年～）
株式会社テーブルクロス	社会貢献型グルメアプリ「テーブルクロス」 あなたの予約が子どもの給食に（2014年～）
一般財団法人H2Oサンタ	フィリピンの子どもたちへの給食支援（2016年～）
株式会社LIFULL	フィリピンの若者育成ワークショップ支援（2017～2018年）
薬院オーガニック株式会社	フィリピンの子どもたちと女性への支援（2015年～）

NPO法人 PALETTE、gooddo 株式会社、NPO法人 We' ll English Academy、株式会社コネクト＆フロウ、ステップフォワード株式会社、Gochiso 株式会社、株式会社ロジック、特定非営利活動法人アークス仏教国際協力ネットワーク、喫茶うずら、中野章吾商店、ウエストコースト、スリースター京都、ゲストハウスたむら、日本キリスト教団 鴨東協会、桃山基督教会クララ会、西正寺、法蔵寺、浄土真宗本願寺派北豊教区門司組、社団法人 国際スピリチュアル協会、連続無窮の会、門真市立第三中学校、立命館中学校・高等学校、立命館大学、清心女子高等学校、国際ソロプチミスト稲城、神戸ゾンタクラブ、かみひとねっとわーく京都（順不同）

受賞歴

- 公益財団法人かめのり財団「第5回かめのり賞」（2011年）
- 特定非営利活動法人パートナーシップ・サポートセンター 第8回パートナーシップ大賞グランプリ（2011年）
- 社会福祉法人京都市社会福祉協議会表彰（2013年）
- 公益財団法人京都オムロン地域協力基金「ヒューマンかざぐるま賞」（2017年）
- 公益財団法人社会貢献支援財団「社会貢献者表彰」（2017年）

加盟団体・ネットワーク等（2019年度）

特定非営利活動法人関西NGO協議会（正会員）、特定非営利活動法人国際協力NGOセンター（正会員）
日比NGOネットワーク（正会員、運営委員）、京都府国際交流団体情報ネットワーク「kokoka国際交流団体ねっと」（会員）



子どもに教育、女性に仕事を

認定NPO法人 アクセスー共生社会をめざす地球市民の会

<https://access-jp.org>

612-0029 京都市伏見区深草西浦町8-85-4

TEL/FAX 075-643-7232 E-MAIL office@access-jp.org